

発掘調査の概要

檜隈寺瓦窯の調査（飛鳥藤原第181-4次）

檜隈寺は渡来系氏族、東漢氏の氏寺とされる7世紀創建の古代寺院です。これまでの発掘調査により、その伽藍配置は地形に沿って北で西に振れる方位をとり、塔を囲んで講堂と金堂を結ぶ回廊の西面に中門を開く等、ほかに例を見ない特徴をもつことがあきらかとなっています。寺の周囲では、7世紀前半から中頃までの竪穴建物や古代と推定される掘立柱建物・掘立柱塀、平安時代後半の幢竿支柱とみられる柱穴等が見つかったほか、寺にとまなう金属製品の工房の存在も指摘されています。

奈良文化財研究所は2008年度以降、国土交通省の委託をうけ、国営飛鳥歴史公園の整備事業にとまなう檜隈寺周辺の発掘調査を実施しています。今回、その事前調査において、檜隈寺に関係するとみられる瓦窯を初めて発見しました。以下では、これを檜隈寺瓦窯と呼びます。調査は5月27日から6月17日までおこないました。

檜隈寺瓦窯は、檜隈寺が立地する丘陵北端の西斜面、檜隈寺講堂の北西およそ50mの位置で検出されました。検出時は、花崗岩が風化してできた黄色い地山に、赤く焼けた土で満たされた遺構の輪郭が斜面上方から下方に向けて伸びていました。焼けた土には瓦が含まれていたため、瓦窯の可能性を考えつつその遺構内部を半分掘り下げていくと、中から天井材と思われる土の塊や瓦が多量に出土し、瓦窯であろうとの推測は確信に変わりました。

ところで、初めての本格的な瓦葺建物である飛鳥寺の創建以降、7世紀の瓦窯は、斜面に下から上へ向けてトンネル状の細長い穴を掘り、その中に瓦を

並べて下から火を焚き焼成する地下式・半地下式^{あな}窯が主流でした。7世紀後半には、緩やかな斜面に瓦を焼成するための四角い部屋（焼成室）を掘り、その一段下に燃料を燃やす部屋（燃焼室）を設けた瓦窯が現れます。この窯は、平らな床面をもつことから、平窯^{ひらがま}と呼ばれます。奈良時代の8世紀後半には、火を効率よく回すため焼成室床面に畦を造りつけた有畦式平窯^{ゆうけいしきひらがま}が現れ、その後、しばらく瓦窯の主流となっていきます。

調査の結果、檜隈寺瓦窯はこの有畦式平窯で、後世の削平により天井や焚口は失われていたものの、焼成室下半全体と燃焼室下半の奥側半分が残っていることが判明しました。したがって、檜隈寺瓦窯が操業していた時期は8世紀後半以降であることは間違いなく、窯を埋める土から平安時代の土器が出土していることや、燃焼室床面に広がっていた炭化材の年代測定結果が平安時代を示していることから、さらに時期が降る可能性が高そうです。

檜隈寺中心伽藍の造営は飛鳥時代のうちに一段落しているため、この瓦窯はおそらくそれ以後の補修用瓦作りのために築かれたものでしょう。過去の調査では、奈良時代から鎌倉時代の瓦もわずかながら出土しており、このころまでは繰り返し補修がおこなわれたと推測されてきましたが、今回の瓦窯の発見はこの推測を裏付けるものといえます。

実は、檜隈寺は文献史料が少なく、謎の多い古代寺院の一つです。しかし、今回の発見によって、檜隈寺が奈良時代以降も補修を受け、その法灯が長く守り継がれていたことが浮き彫りになりました。檜隈寺の長い歴史は、少しずつではありますが、着実にあきらかになろうとしています。

（都城発掘調査部 森先 一貴）



檜隈寺瓦窯（北西から、奥の森が檜隈寺講堂跡）



燃焼室床面の炭化材（南から）